



能と狂言

川崎市定期能 第100回記念誌

The 100th
anniversary
第100回 川崎市定期能



第一〇〇回川崎市定期能の開催にあたって

川崎市長 福田 紀彦

川崎能楽堂の第一〇〇回川崎市定期能にようこそお越しくださいました。

この定期能は、一九八六（昭和六十一）年の川崎能楽堂開館から二十七年にわたって続けられている歴史ある公演であり、様々な流派により開催され、同じ演目でもそれぞれが醸し出す雰囲気を感じることができるなど、他都市にはない川崎市が誇る公演です。

定期能では、人間国宝級の演者による上質で優れた公演が行なわれ、伝統文化の普及のために、多くの市民の皆様にも広く鑑賞機会が提供されています。また、最近では、公演に先立ち、演者による見どころ等の解説があり、演目の内容や能楽そのものの理解に繋がる事前講座が開講されるなど、観客の皆様にも、公演を一層楽しんでいただくための取組も行われています。

今後も定期能の継続により、魅力ある公演等の鑑賞機会が提供され、多くの方に足を運んでいただけることを期待しています。

川崎能楽堂は、観客席から演者までの距離が近いことが特徴の一つです。六百年以上の歳月を経てなお、演目や様式等が大きく変わることなく、現代まで受け継がれている能の世界を、演者の息づかいを感じながら存分にお楽しみいただきたいと思います。



第一〇〇回川崎市定期能開催にあたって

川崎市文化財団 理事長 北條 秀衛

この度、第一〇〇回の記念となる川崎市定期能を開催する運びとなりました。これもひとえに、今までご出演いただいた能楽師の皆様の熱演と、そして川崎市定期能ファンの皆様の温かいご声援のお蔭と心より感謝申し上げます。

川崎能楽堂は一九八六年、能「翁」で柿落としとなりました。開館記念公演となった「船弁慶」は、発売後数分で完売するほどの人気ぶりで、翌年より年に三回から四回の公演を重ねながら、開館二十七年の歳月をかね本日第一〇〇回の公演を迎えます。

また、この度の公演は、第一〇〇回の記念に相応しく、華やかでおめでたい曲ばかりを集めており、ご出演には、能楽界を代表する演者のおひとりである梅若玄祥師をはじめ、角当行雄師、三宅右近師、人間国宝の宝生閑師他、一流の演者をお迎えしてお届けいたします。

川崎能楽堂は、大変小規模ではありますが、舞台を間近で鑑賞できるという利点により演者の息づかい、所作や装束の美しさ、また能面の表情までもが手に取るように伝わり、地謡やお囃子の響きも臨場感たっぷりに味わっていただけます。いわば一四八の特等席とでもいふべき空間で能楽鑑賞ができることは、他の能楽堂にはない川崎能楽堂の特徴です。

私共川崎市文化財団では、今後も川崎市定期能を継続していくばかりではなく、川崎能楽堂の特性を生かした企画を提供することで、能楽の普及をはじめ、文化振興に寄与しながら川崎で行われる豊かな芸術活動を市内外に発信してまいる所存でございます。今後ともご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

また、この度の記念誌発行に際し、大変お忙しいにもかかわらず、歌人である馬場あき子先生をはじめ川崎市定期能にゆかりの深い能楽師の皆様に心温まるお言葉を寄せていただきましたこと、誌面を借りて御礼申し上げます。

本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。どうぞごゆつくりとご鑑賞ください。

歌人

馬場あき子

川崎に能楽堂が建つというので興奮したのは昭和も五十年代の終わりのころだったと思う。はじめは何でも上演できる演芸場という声もあったようだが、能楽堂を持っている市などめつたにないし、個性的でいいという意見も強かった。能楽堂で落語をやってもいいし、日本舞踊、地唄舞、コンテンポラリーな舞踊も管弦楽も可能というような意外な場面の広さもあつて有効であるといふことで、日本的で独自性の強い能楽堂建設が決定になった。とても素晴らしい決断であつた。

出来上がった建物をお披露目前に拝見する場面があつて、観客席の狭さに失望したが、営利目的ではない市の文化活動の一環であるといふことで、大いに自負したものだ。今回第百回の公演に当たり、梅若玄祥さんの「石橋—大獅子」が出るというので、川崎能楽堂の活動もいよいよ佳境に入ったと喜ばしい。

私は第十五回の友枝昭世さんの「杜若」と香川靖嗣さんの「葵上」が上演される時、初めて拝見に上がった。それ以後は、たまたま怠けていて、というより、川崎の北部に住む私どもの方では宣伝がゆきわたらず、観客となる場面に恵まれなかったのだ。

しかし、今はじめて第百回の番組を見すると、当代屈指の人氣能楽師と狂言

師の出演が続いていて、よくぞこれほどの水準を保ってきたものだと驚くばかりである。これは大変貴重な文化活動であり、川崎がこうした古典芸能に深い理解をもっている証だと思つて、感銘を新たにしたいことである。幸い能狂言は世界文化遺産に登録された。これからも広い宣伝効果をあげつつ、いよいよ発展していくことを期待してやまない。

本日の出演者より

■観世流シテ方 梅若家当主
伍拾六世二代 梅若六郎玄祥

川崎市定期能の第一〇〇回記念誠にめでとふございます。

私も二十三年前より出演させて頂き、この能楽堂での空間を非常に楽しみに、勤めさせて頂いております。

ご当地とは非常に、縁が深く、私も若い頃より祖父および父と共に伺つたことをよく覚えております。

現在は川崎市定期能を中心に勤めさせて頂いておりますが、流一派に留まらず、能を、鑑頂けることは私共、能役者にとりまして非常にありがたいことでございます。

是非ともこの後二二〇〇回、三三〇〇回と続きますことを祈念し、お祝い申し上げます。

本日はご来場誠にありがとうございます。精一杯の舞台を勤めさせて頂きます。

■観世流シテ方

角当行雄

百回記念おめでとふございます。私は十二回目より出演させていただいております。また、川崎能楽堂にて、謡曲・仕舞の教室も受け持つておりますがこの教室では、舞の稽古では舞台を使用するなど、こんな贅沢な稽古場は他にはなく、生徒さんにも大満足です。演能の時は二五〇席ほどの客席がかえつて舞台との一体感を増し、演者の息づかいが感じられるのも大きな特徴で、他の能楽堂では味わえないことです。

財団の方とは、演能のたびに何かと相談すること、意見や要望なども率直に伝わりやすいのも助かります。日本文化に対する財団の熱意、これもひとえに市長の理解があればこそだと思います。

私も川崎に在住し二人の川崎市民として川崎に能楽堂があることを本当に嬉しく思っております。今後ますます能楽の発展にも、尽力いただきます様切に祈念いたしますと共に、二十七年の長きにわたつて迎えられた百回目の記念公演を、心して勤めたく思っております。

■和泉流狂言方

三宅 右近

第百回記念川崎市定期能を祝して この度、川崎市定期能が第百回を迎えられ、誠に喜ばしく、お祝い申し上げます。この記念すべき定期公演にて舞台を勤めさせて頂いたこと、有難く存じます。

川崎能楽堂の歴史と共に歩んでこれた二十七年間、川崎市の文化向上と能楽普及におきまして、優れた企画力によつて良き舞台を提供してこられた並々ならぬ努力に敬意を表する次第でございます。

能楽がユネスコの制定する無形文化遺産として、第一回目に認定されましたが、まだまだ広く能楽が普及しているとは言えない状況にあり、その中にあつて川崎のお客様は大変熱心に舞台を、鑑くださつております。こ川崎にとる能楽のともしびが、広く全国に普及することを願つてやみません。

第百回の記念公演を契機として、川崎能楽堂の今後益々の発展を心よりお祈り申し上げます。



■観世流シテ方・川崎市文化大使
鶴澤 久

川崎市文化財団主催による能楽の定期公演を二十七年間休むことなく続けてこられたこと、そして今年(平成二十五年)百回を迎えられたことに、一能楽師として心よりお祝いと感謝を申し上げたいと思います。

地方公共団体がかくも長きにわたり、年三〜四回の能楽公演を定期的に催し、継続していくことは並大抵のことではありません。川崎市全体の、そして運営を任されている川崎市文化財団の歴代の方々の多大なるご努力の賜物と思っております。

今、日本の伝統文化が見直されています。室町時代に生まれた「能」から今の日本人が学ぶことは沢山あると思います。

平成三年から、川崎能楽堂で「夏休み能楽体験鑑賞教室」を毎年開催させていただいています。その中で、川崎市内・市外の子どもたちが世界に誇れる日本の古典演劇である「能」を子どもの中から親しみ触れて、知っていくという機会を提供してくださっていることにも深く感謝申し上げます。

また、開館当時から開設されている「能楽教室」も「能」の謡や仕舞を趣味・教養として楽しむだけでなく、大きな声を出したり、身体を動かすことによつて、健康にも大いに役立つかもしれません。更に子どもたちも含め、「能」の愛好者の方たちが「能」

の面白さを周囲に伝え、能の鑑賞者が増えていくことも大事なことです。そして少し大げさですが、子どもたちにとつて、「能」を学ぶことが日本という国の真の理解につながり、国際人として自分の言葉で日本を語れる人になってくれたらと願っています。

これからの「川崎市定期能」という催しが長く続くことを願うとともに、私も微力ながら出来る限りの助力を惜しまず、「能」を発信していく川崎市文化財団のお手伝いをしていきたいと思っております。

この度は、百回記念誠にありがとうございます。

■喜多流シテ方
香川 靖嗣

第百回川崎市定期能記念公演に寄せて

二十七年の長きにわたり、継続してこられた貴川崎市定期能が、百回目の記念公演を催されます事、お祝い申し上げますと共に、これまでのご功勞に対し、畏敬の念を禁じ得ません。私が初めて貴舞台で勤めさせていただいた時の印象は鮮烈で、舞台と見所との感覚が想定外に近かったこと、能を勤めるとき、我々シテ方が一番頼りとするシテ柱等の丈が低く、面の内から柱を確認し難く、自分の位置、方向が掴めず、思い切つて勤めることが出来ませんでした。が、数年前に柱丈を改善して

ます。

昨今、世の不況により、自治体や企業が主催する能の会、薪能が次々となくなっております。その中であつて、川崎市定期能百回は、大変素晴らしい、川崎市文化財団のご努力とご理解に頭が下がる思いでございます。

世界遺産にも登録され、日本の伝承芸能である能を、これからも市民の皆様、また県民の皆様、さらには世界中の方々に広め、守っていただきたいと願うと共に、私たち能楽師も心を込めて精一杯勤めてまいります。本日は本当におめでとうございます。そして、ありがとうございます。

■喜多流シテ方 人間国宝
友枝 昭世

川崎市定期能百回記念公演を
迎えるにあたって

能楽堂開場以来、公演を続けていただいております川崎市文化財団並びに関係者一同に、演者の一人として深く感謝申し上げます。

川崎能楽堂の空間はコンパクトですが、お客様の呼吸が直に感じられ、演者のそれと相俟つて得も言われぬ心地よさで勤めることができる舞台です。他の能楽堂とはひと味違う感覚で楽しませていただいております。それが故に選曲に大変苦心いたします。もちろん登場人物が少ない曲で、何よりシテの細やかな心情や、面づかいが伝えられる、大ホールでは得られない

く、ださり以後、演り易くなりました事、有難く思っています。

見所の目が近いということは、心身の僅かな乱れや隙、更には自分の心の内までが見透かされている様で、常とは違つた緊張感で以つて、舞台を勤めさせていただいております。

然し乍ら見所側からは「あれ程の近距離から見ると、演者達の息づかい、気迫のあり方迄もが肌で感じられるので、川崎能が楽しみ」という声を多く耳にいたしました。

自分自身、そうした厳しい目に見透かされることの無き様、真摯な気持ちの舞台を今後、も勤めさせていただければと願っています。

貴川崎市文化財団の「芸術文化の発展振興」という事業目的のもと、今後の更なる「発展を祈念致し、お祝いの詞とさせていただきます。

■観世流シテ方 鍔之丞家当主
九世 観世 鍔之丞

川崎市定期能が第一〇〇回を迎えられるにあたり、お祝いを申し上げます。

まずは、誠にありがとうございます。川崎能楽堂は小規模ではありますが、他の公共の能楽堂にはない、熱い情熱あふれるスタッフの企画と運営で、内容の濃い舞台を上演し、幅広い能楽ファンに支持を得られています。私共とすれば、関係の皆様方

本来の能の魅力を伝えられるような曲をを選んでおります。

これまで一番一番気を込めて勤めてまいりました。今後も川崎市定期能のご継続とご発展をお祈り申し上げます。

■和泉流狂言方
九世 野村 万蔵

川崎市定期能百回公演によせて

川崎市定期能が記念すべき百回公演を迎えられましたこと、まことにありがとうございます。主催の公益財団法人川崎市文化財団および関係者の皆様の、多大なるご尽力に深く敬意を表します。私も幾度となくこの川崎市定期能に出演させていただき、数々の狂言を演じられたことを大変うれしく思っております。

また、平成二十年からは、光栄なことに、「野村万蔵による芸能サロン」として、『狂言を楽しむ』と銘打つた公演を継続的に開催していただいております。毎回たくさんの方がお運びくださり、お客様との距離が近い川崎能楽堂ならではの、隅々まで演技が届く上に、その表情が手に取るようにわかる貴重な場であると感じております。

是非今後も末永く発展されることを祈念致しております。

のご努力に感謝を申し上げる次第です。また、能楽堂の環境もユニークで、市民の生活の中に能楽堂がぽんとある感じで、日常的な生活の場の真ん中に全く日常生活とは異なる能狂言の世界が、一歩建物の中に踏み込めば存在するというのもとても魅力的なことです。かつて在った私たちの曾祖父や祖父等が建てた東京の下町の能楽堂を彷彿とさせて、何かとても懐かしい気持ちになります。そして子供達に能狂言を普及させるといふお仕事は、まさにこの能楽堂の場が最適です。子供達にとつて、人生体験の場であり、遊びの場であり、友達交流の場であり、勉強の場でもあります。どんなことをしてもこのようなお仕事は運営が大変だと思います。でもどうかして、このユニークで実のある企画を続けていただけたならばと、私共にとつては大変有難く、継続を願っております。

まだまだ第二、第三、第四と続いていかれることをお祈り申し上げます。

■観世流シテ方
観世 恭秀

平成の伝統の二里塚

能の伝統と申しますか、作品の継承と申しますか、すべからず伝統と申しますと、まず演ずる者の技芸の継承、研磨とその両輪としての観客、その両者をプロモートする体制が必要となります。その三者一

■大蔵流狂言方 人間国宝
四世 山本 東次郎

この度、川崎市定期能が百回の記念公演を迎えられますこと、本当におめでとうございます。

ついこの間のように思っておりましたが、もう二十七年も経つたのでしょうか、川崎という土地をこよなく愛した故米山市郎氏が、川崎を知的で文化の香る街に変身させたい、その象徴として是非とも能楽堂を造りたいとお話を伺つた時、その英断に心よりエールを送りました。

川崎能楽堂の利点は駅に近いこと、しかし商業施設の多い川崎駅近くにこれだけの用地を確保することは大変なことだったと存じます。他の能楽堂に比べて小さめですが、私ども狂言方にとりましては、それにあわせてちょうど良い曲が多数ございます。舞台と見所が一体となる、それを確実に味わわせてくれる舞台です。

見所の座席数が少ないため、経済的にはたいへん厳しい状況だったと存じますが、それを百回まで続けてこられた川崎市文化財団の皆様のご尽力、衷心より有難く存じます。

文化を継承し、次代に繋げていくためには、多くの時間と皆様のお力が必要です。継続は力なり、この川崎能楽堂と川崎市定期能がいつまでも川崎市民に愛され、日本文化の普及啓蒙の拠点として、着実な歩みを続けられることを祈念して、心からのお祝いを申し上げます。



●川崎能楽堂は148席ですから、お客様にとっては贅沢な空間ですね。

そうですね。橋掛かりはちよつと短いですけれども舞台はきちんとした大きさがありますし、面はもちろん、装束の美しさや演者の息づかいまで伝わりますからね。

もともと能は、屋外で演じられていました。今よりもっと大雑把に演じられていたと思います。それが明治以降にだんだんと今の能楽堂のスタイルになって、見所の数が300〜700になりました。1000席を超すと能面の表情は見えませんが、うちの梅若能楽学院会館の舞台も300ちよつとしかありません。私の父親が能面の表情が見えないのは嫌だということ、わざわざ狭くしたんですね。それと同じで川崎の舞台は手の上げ下ろしから面の表情などもすごく良くはつきり分かる。気の抜けない空間で演じることは演者にとって必要ですし、お客様にとっては密な空間で見ていただけるので、それは私どもにとっても嬉しいことなのです。

隅から隅まで見られてしまい、役者の粗が目立ってしまうからですね。

●そしてこの度、第100回川崎市定期能にご出演いただくことになりました。

まずは第100回おめでどういいます。私は「石橋 大獅子」に出演するわけですが、石橋は非常におめでたい演目のひとつであり、能の持つ力強さの中では最高のものかもしれません。文殊菩薩のお使いで架空動物である獅子が登場しますが、前場では、苔むした細い橋（石橋）を修行者（寂昭法師）が渡ろうとすると、それを止められます。生半かな修行では渡れないと。つまり人生に例えているのです。人生というのは山あり、谷ありで、そんな簡単な考えでは渡れない。

それと日本人が中国の話を描くというのが面白いですね。意外と能には多いのですが、その当時の日本人が持つていた中国に対するイメージは、すごく壮大で神秘的だったと想像できます。もちろん、見どころは後場の獅子の舞いではありませんが、前半のお話は、ご自分の人生と照らし合わせて見ていただくと結構面白いですよ。能というのはストーリー的には決して複雑ではなく、非常に単純にできている。そしてその単純な中に様々な方の、色々な思いを重ねられるようになっていくんです。例えば恋愛ものなどでは、「ああ若い時にこんな



Interview インタビュー

(KAWASAKI ART NEWS 12月号より抜粋)

梅若 玄祥さん

梅若 玄祥 (うめわか げんしょう)

観世流シテ方 梅若家当主 56世梅若 六郎 二代梅若 玄祥
重要無形文化財総合指定保持者。日本芸術院会員。日本能楽会理事。
(社)日本演劇協会理事。(財)梅若会理事長

川崎能楽堂で1987年から始まった川崎定期能が、12月14日(土)に記念すべき第100回を迎えます。第二部に出演される梅若玄祥さんに「謡」の心得、川崎市定期能への思いなどを語っていただきました。

●玄祥先生が地頭を勤めると謡が引き締まり、素晴らしくなると評判です。

能はシテが中心になって演じますが、私は父と祖父からシテを演じさせるのは地謡だと教えられました。能は謡の台本からできているのだから謡を基本に考えなさい「謡の意味を十分に表現できる力を持ちなさい」ということです。

確かに、演じることは稽古の積み重ねでできるけれども、謡は稽古だけではできないところがあるのです。そのためには、ふだんから考える習慣を身につけ、感性を養っていくことが大事になります。

●舞台の上ではどういうことを心がけていますか？

私には「玄祥の謡い方」というものが

恋愛をしたなあとか、若い方は「今後こうありたいなあ」と思っていていたただけるのです。

●今後の活動についてどのようにお考えですか？

後進の指導は言わずもがなですが、今は、私を含めて団塊の世代が勢いを持たなくてはいけない時代だと思うんです。そこで、能の持つ良さとか力とか、ありつたけのものを出していき、それを若い人たちに見てほしい、私と同じ世代の人にも見てほしいと思っています。

というのは、私たち団塊の世代は、これまで新しいものは切り開いてきたのでしようが、最近はこちらと視野が狭くなっていると思うのです。私もその点は反省しているんですが、もつと横を見てほしいというか、脇をみてほしい。日本には能をはじめ、素晴らしい古典芸術がたくさんあることをもつと知ってほしいのです。最近、友人に謡を勧めてみたら「やつてみて良かった。今まで自分が知っていた世界とは違う世界が拓けた」と言われました。ですから私の同世代や五十代以降の方に、もつと能を見ていただきたいと思っています。

ありますが、そればかりを押し付けてはいけません。例えば、役者の演技を見て、感じて、どういう風に謡うかというところが大切になります。それと、地謡は一人ではなく六人や八人で謡いますから、その人たち全員を謡わせることが重要なことです。父からは「自分勝手に謡を謡わないように」とよく言われ、今もそれを心がけています。

●玄祥先生は、川崎市定期能にも23年前からご出演いただいています。

川崎能楽堂は非常に狭い空間です。私たち演者は狭い空間が一番怖いんです。観客の視線が近いので、私も初めて川崎能楽堂の舞台に立った時は、ふだんとは違う緊張感がありました。

●若い世代についてはいかがですか？

同じ土俵に上がつてしまえば上も下もない世界——それが芸術だと思っています。つまり舞台は、先輩後輩、師弟が遠慮なく戦える場所なんです。ですから最近、若い人たちが「僕らの能を謡っていただけですか」という依頼がある。その真意は、私が挑戦を受けるのではなく私が挑戦を挑むことなのです。その結果がどうであれ、それを相手はどう感じるかが大事です。もし仮に私が負けても、すごく嬉しいことじゃないですか。

●若手の演者は、そういう環境があることで芸が磨かれますね。

そうですね。そういう切磋琢磨の場を若い人たちに提供していきたいですね。それが私のこれからの一番の仕事かもしれない。



番組

第一部 午後1時 開演（午後12時30分開場）

舞囃子 高砂 梅若 玄祥 大鼓 安福 光雄 太鼓 金春 國和 地謡 河本 望 川口 晃平
小鼓 曾和 正博 笛 一噌 庸二 井上 和幸 松山 隆雄 馬野 正基

狂言 二人袴 シテ 三宅 右近

アド 三宅 近成
アド 高澤 祐介
アド 三宅 右矩

能 猩々乱 ツレ角当 直隆
シテ 角当 行雄
ワキ 大日方 寛 大鼓 安福 光雄 太鼓 金春 國和
小鼓 曾和 正博 笛 一噌 庸二

後見 山中 遼晶 地謡 河本 望 馬野 正基
松山 隆雄 川口 晃平 梅若 紀彰 鷹尾 章弘
坂口 貴信 貴信 鷹尾 章弘

第二部 午後3時半 開演（午後3時開場）

狂言 舟渡髯

シテ 三宅 右近

アド 三宅 近成
アド 前田 晃一

能 石橋 ツレ角当 直隆
シテ 梅若 玄祥
ワキ 宝生 閑 大鼓 安福 光雄 太鼓 金春 國和
大獅子 小鼓 曾和 正博 笛 一噌 庸二

後見 松山 隆之 地謡 井上 和幸 鷹尾 章弘
梅若 紀彰 坂口 貴信 角当 行雄
山中 遼晶 山中 正道

写真：吉越スタジオ

あらすじ

狂言「二人袴」

ふたりばかま

髯入りの日、恥ずかしがつて中々出かけようとしない髯（アド）をみた父親（シテ）は、仕方なく途中まで付き添うことにしました。舅（アド）の屋敷の前で、父は髯に長袴を穿かせて送り出そうとしたところ、太郎冠者（アド）に見つかってしまい、父も座敷に招かれてしまいました。袴が一つしかない二人がとった行動とは…。

狂言「舟渡髯」

ふなわたしむこ

髯（アド）は舅の屋敷へ髯入りの挨拶に向かうため、渡し船に乗ることにしました。すると髯面の船頭（シテ）が髯の持っている酒樽に目を付け、一口欲しいと迫ります。進物用だからと髯が断ると、船頭は舟を漕ぐのをやめてしまいます。根負けした髯は仕方なく酒を飲ませますが、酒はあらかじめ飲まれてしまいました。ほとんど空になった酒樽を持って舅の家を訪ねた髯ですが、さて、そこに現れた舅とは…。

能「猩々乱」 双之舞

しょうじょうみだれ

中国の金山の麓に住む高風（ワキ）は、大そう親孝行と評判で、夢のお告げに従って揚子の市で酒を売ると次第に富貴の身となりました。市の立つことに高風の店へ来て酒を飲む者がいます。その男はいくら飲んでも顔色が一向に変わらないので、ある日その名を尋ねると、海中に住む猩々だとあかして帰って行きました。そこで高風は、ある月の美しい晩、今度は潯陽の江のほとりに出、酒を壺に湛えて猩々を待つことにします。

（能はここから始まります）やがて猩々が波間から浮かび出て、高風と酒を酌み交わし、酒に酔い舞を舞い、高風の素直な心根を誉め、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えていきます。

※猩々乱になると特殊な舞となります。

能「石橋」 大獅子

しやつきよう

大江定基は出家して寂昭法師と号し、中国、印度の仏教関係の遺跡を巡礼し、清涼山へやってきます。そして、石橋を渡ろうとすると一人の童子が現れ、この石橋は人間が容易に渡るものではないと戒め、石橋のいわれなどを語った後、橋の向こうは文珠の浄土であるから、ここで待てばやがて菩薩の来現があるだろうと告げて姿を消します。（中入）

文珠の使獣である獅子（後シテ）が石橋の上に現れ、牡丹の花の間を勇壮に舞い戯れ、千秋万歳を祝い舞い納めます。

※小書 「大獅子」は、白赤二頭の獅子により一層豪快・壮麗な舞となります。



Regularly scheduled performance list 100 回の歩み〈定期能公演一覧〉

100 回の歩み〈定期能公演一覧〉

流派	回	年月日	第 1 部			第 2 部		
			能	狂 言	仕 舞 他	能	狂 言	仕 舞 他
観 世	舞台 披露	86. 6. 7	舞台披露記念 能「翁」(観世元昭)			船弁慶(前:藤波重和、後:坂井音重)	高 砂(観世元昭) 島(木月孚行)	
春の能			87. 3. 21	羽 衣(高橋 勇)	盆 山(善竹十郎)			
観 世	1	87. 6. 13	忠 度(山本順之)	覆音曲(大蔵弥太郎)		三 輪(観世栄夫)	昆布壳(大蔵基嗣)	
宝 生	2	87. 9. 12	藤 戸(近藤乾之助)	成上り(野村万之介)		井 筒(本間英孝)	清 水(野村万之介)	
宝 生	3	87. 12. 5	黒 塚(三川淳雄)	覆音曲(能村英丘)		鉢 木(本間英孝)	仏 師(能村英丘)	
観 世	4	88. 3. 12	杜若 恋之舞(観世清和)	墨 塗(三宅右近)		百 萬(観世清和)	素袍落(三宅右近)	
観 世	5	88. 6. 11	海士 寤(坂井音重、観世元昭)	悪 坊(山本東次郎)	弱法師(観世恭秀)	葵上 空之祈(観世元昭)	千 鳥(山本則直)	鶴 (木月孚行)
観 世	6	88. 9. 17	俊 寛(観世元昭)	地藏舞(山本則直)	野 宮(木原康夫)	安達原 黒頭(藤波重和)	覆音曲(山本則直)	松 風(観世元昭)
宝 生	7	88. 12. 10	千 手(小倉敏克)	清 水(山本則俊)		通小町(塚田光太郎)	文山立(山本則俊)	
宝 生	8	89. 3. 11	花 月(本間英孝)	鐘の音(野村万作)		乱 (高橋 章)	昆布壳(野村万作)	
観 世	9	89. 6. 10	忠 度(観世元昭)	蛸 牛(山本則俊)	花月 キリ(武田志房)	山姥 白頭(野村四郎)	文 蔵(山本東次郎)	花塚 狂(観世元昭)
宝 生	10	89. 12. 2	巴 (田崎隆三)	胸 突(山本則俊)		弱法師(本間英孝)	伯母ヶ酒(山本則俊)	
観 世	11	90. 2. 10	鶴 亀(観世元昭)	花々頭(山本東次郎)	羽衣 クセ(坂井音重)	船弁慶 前後之替(関根祥夫)	佐渡狐(山本東次郎)	羽衣 キリ(観世元昭)
梅 若	12	90. 6. 23	松 風(角当行雄) 土蜘蛛(梅若六郎)	因幡堂(山本則直)		<狂言づくし> 解説:善竹十郎 仏師(大蔵吉次郎)、小舞:鐘の音(善竹圭五郎) 蛸牛(善竹十郎)		
宝 生	13	90. 12. 1	百 萬(本間英孝)	瓜盗人(三宅右近)		玉 葛(寺井良雄)	隠 狸(三宅右近)	
観 世	14	91. 2. 2	高 砂(坂井音重)	富士松(山本則直)	素謡:神歌(観世元昭)	葛 城(関根祥六)	入間川(山本則直)	梅 (観世元昭)
喜 多	15	91. 6. 15	杜 若(友枝昭世)	布施無経(山本東次郎)		葵 上(香川靖嗣)	空 腕(山本東次郎)	
鉄 仙	16	91. 9. 21	羽 衣 和合之舞(鶴澤久)	樋の酒(野村万作)	笠の段(鶴澤雅)歌占 キリ(山本順之)	藤 戸(観世鏡之丞)	鐘の音(野村武司)	花塚 狂(鶴澤 雅)
宝 生	17	91. 12. 7	葛 城(前田晴啓)	文 蔵(山本則直)		羽 衣(本間英孝)	伊文字(山本則直)	
観 世	18	92. 2. 1	田村 替装束(木原康夫、沖宗久)	附 子(山本則直)	老 松(藤波重和)	葵上 梓之出(藤波重満)	鐘の音(山本則直)	羽衣 キリ(田邊竹生)
喜 多	19	92. 6. 13	巻 絹(香川靖嗣)	鐘の音(野村万之丞)		通小町(友枝昭世)	文 荷(野村良介)	
梅 若	20	92. 9. 19	融 酌之舞(角当行雄)	柿山伏(山本則直)		半 蔵(梅若六郎)	膏薬煉(山本則直)	
宝 生	21	92. 12. 12	経 政(本間英孝)	鐘の音(野村万之介)		天 鼓(大坪喜美波)	蟹山伏(野村武司)	
観 世	22	93. 2. 6	小袖曾我(田邊哲久)	未 広(山本則直)	素謡:神歌(観世元昭) 雲林院 クセ(木原康夫) 船弁慶 キリ(木原康之)	殺生石(藤波重和、藤波重孝)	素謡:竹生島(田邊竹生) 花塚 狂(観世元昭)	
宝 生	23	93. 5. 22	杜 若(本間英孝)	清 水(山本泰太郎)		阿 漕(三川淳雄)	文山立(山本泰太郎)	
梅 若	24	93. 9. 18	葛城 大和舞(角当行雄)	呼 声(山本則直)		紅葉狩 替之型(梅若六郎)	附 子(山本泰太郎)	清 経(角当行雄) 通小町(佐藤恭司)
鉄 仙	25	93. 12. 11	鉢 木(鶴澤 雅)	萩大名(野村万之介)		安達原(鶴澤久)	栗 焼(野村万作)	
観 世	26	94. 2. 12	経 正(田邊哲久)	棒 縛(山本東次郎)	笠之段(角寛次朗)	小鍛冶(観世恭秀)	千 鳥(山本東次郎)	松虫 クセ(田邊竹生)
鉄 仙	27	94. 5. 28	阿 漕(鶴澤 雅)	呂 蓮(野村万作)		楊貴妃(鶴澤久)	磁 石(石田幸雄)	女郎花(山本順之)
喜 多	28	94. 10. 1	羽 衣(友枝昭世)	佐渡狐(三宅右近)		花 月(香川靖嗣)	成上り(三宅右近)	
宝 生	29	94. 12. 10	班 女(近藤乾之助)	雁大名(野村万之介)		藤 (本間英孝)	瘦 松(野村万作)	
観 世	30	95. 2. 18	放下僧(田邊哲久)	因幡堂(山本則直)	嵐山(高橋弘) 巴(観世恭秀)	葵上 梓之出(武田志房)	鐘の音(山本則直)	田村 キリ(寺井崇) 東北 キリ(田邊竹生)
梅 若	31	95. 7. 8	杜若 恋之舞(梅若六郎)	呂 蓮(三宅右近)	雲林院 クセ(角当行雄) 山姥 キリ(小山文郎)	阿 漕(角当行雄)	井 杭(三宅右近)	井筒(山崎英太郎) 女郎花(松山隆雄)
喜 多	32	95. 9. 30	弱法師(友枝昭世)	伯母ヶ酒(野村萬斎)		玉 葛(香川靖嗣)	栗 焼(野村万作)	
宝 生	33	95. 12. 2	清 経(田崎隆三)		国栖(朝倉俊樹) 猩々(亀井保雄)	隅田川(本間英孝)		鶴亀(金森秀祥) 鞍馬天狗(水上輝和)
観 世	34	96. 2. 17	巴 (観世芳宏)	舟ふな(野村良介)	笛之段(田邊竹生) 山姥 キリ(寺井崇)	胡 蝶(田邊哲久)	仏 師(野村良介)	笠之段(角寛次朗)
鉄 仙	35	96. 6. 8	通小町(鶴澤 雅)	魚説法(野村良介)	嵐 山(観世曉夫)	鉄 輪(鶴澤久)	柑 子(野村良介)	松虫 キリ(鶴澤 雅)
梅 若	36	96. 9. 14	自然居士(角当行雄)	磁 石(三宅右近)	井筒(平井俊行) 田村 キリ(梅若靖記)	天鼓 弄鼓之楽(梅若六郎)	文相撲(三宅右近)	雲林院(土田晏土) 女郎花(会田昇)
宝 生	37	96. 12. 7	井 筒(本間英孝)	八句連歌(山本東次郎)	殺生石(朝倉俊樹) 唐船(前田晴啓)	藤 戸(水上輝和)	地藏舞(山本東次郎)	羽衣 キリ(佐野由紀) 女郎花 キリ(中村孝太郎)
観 世	38	97. 3. 29	橋弁慶(観世恭秀)	昆布壳(野村史高)	放下僧 小歌(田邊竹生) 玉之段(寺井崇)	吉野天人(田邊哲久)	佐渡狐(野村万之丞)	難波(武田宗和) 野守(高橋弘)
鉄 仙	39	97. 6. 7	天鼓 弄鼓之楽(山本順之)	呼 声(野村万之丞)	西行桜(鶴澤郁雄)	巴 (鶴澤久)	鐘の音(野村英丘)	
喜 多	40	97. 9. 6	忠 度(香川靖嗣)	富士松(野村史高)	玉之段(友枝昭世)	阿 漕(中村邦生)	覆音曲(小笠原匡)	松 風(友枝昭世)
宝 生	41	97. 12. 13	清 経(本間英孝)	講演「日本文化と能」(ドナルド・キーン)		杜若 沢辺之舞(前田晴啓)	講演「日本文化と能」(ドナルド・キーン)	
観 世	42	98. 3. 14	花 月(田邊哲久)	舟ふな(野村万蔵)	兼平(高橋弘) 花塚 狂(観世恭秀)	羽衣 和合之舞(観世芳伸)	清 水(野村万蔵)	弓八幡(寺井崇) 敦盛 クセ(田邊竹生)
梅 若	43	98. 6. 20	頼 政(角当行雄)	井 杭(三宅右近)	松風(会田昇) 花月 キリ(角当直隆)	百 萬(梅若六郎)	雷 (三宅右近)	嵐山(井上和幸) 玉之段(森田幸永)
喜 多	44	98. 9. 5	夕顔 山之端出(友枝昭世)	千 鳥(山本則俊)		葵 上(香川靖嗣)	鱧包丁(山本東次郎)	
宝 生	45	98. 12. 5	東 北(寺井良雄)	覆音曲(山本則直)		熊 坂(本間英孝)	名取川(山本則直)	
観 世	46	99. 3. 6	高 砂(観世恭秀)	謀生権(野村万之丞)		小袖曾我(高橋 弘)	仏 師(野村万之丞)	
梅 若	47	99. 6. 19	松虫 勘盃之舞(角当行雄)	文 荷(三宅右近)	受女 キリ(梅若晋矢) 鶴之段(角当直隆)	殺生石 白頭(梅若六郎)	素袍落(三宅右近)	松風(森田幸永) 敦盛 キリ(梅若靖記)
鉄 仙	48	99. 9. 4	半 蔵(鶴澤久)	伊文字(山本則俊)		隅田川(浅見真州)	昆布壳(山本則直)	
宝 生	49	99. 12. 4	井 筒(内田芳子)	柑 子(野村萬斎)		山 姥(後藤裕子)	魚説法(石田幸雄)	

流派	回	年月日	第 1 部			第 2 部		
			能	狂 言	仕 舞 他	能	狂 言	仕 舞 他
観 世	50	00. 3. 11	清経 替之型(観世恭秀)	梟山伏(野村万禄)		鉄 輪(坂井音重)	鐘の音(小笠原匡)	
喜 多	51	00. 6. 10	阿 漕(香川靖嗣)	蛸 牛(三宅右近)		玉 葛(友枝昭世)	墨 塗(三宅右近)	
鉄 仙	52	00. 9. 2	三 輪(観世曉夫)	狐 塚(三宅右近)		鶴 白頭(鶴澤久)	文相撲(三宅右近)	
宝 生	53	00. 12. 2	羽衣 盤渉(本間英孝)	悪 坊(山本則俊)		忠 度(水上輝和)	鎌 腹(山本則俊)	
観 世	54	01. 3. 10	田 村(観世芳伸)	柑 子(野村与十郎)		巻 絹(観世恭秀)	酢 置(野村祐丞)	
梅 若	55	01. 6. 16	弱法師 盲目之舞(角当行雄)	腰 折(三宅右近)	一調 春日龍神 (梅若六郎・助川治)	二人静(梅若六郎)	宗 八(三宅右近)	巴 雲林院 クセ(梅若晋矢) 龍 虎(赤瀬雅則・森田幸永)
喜 多	56	01. 9. 15	経 政(友枝昭世)	昆布壳(野村万之介)		杜 若(香川靖嗣)	仏 師(野村万之介)	
宝 生	57	01. 12. 8	雲林院(小林与志郎)	茶 壺(山本東次郎)		猩 々(本間英孝)	八句連歌(山本東次郎)	
観 世	58	02. 3. 9	放下僧(田邊哲久)	梟山伏(野村万之丞)		野守 黒頭(観世恭秀)	成上り(野村与十郎)	
梅 若	59	02. 6. 15	隅田川(角当行雄)	呂 蓮(三宅右近)	賀 茂(井上和幸) 大江山(梅若晋矢)	船弁慶 前後之替 (前:角当直隆・後:梅若六郎)	棒しばり(三宅右近)	通 盛(会田昇) 水無月蔵(小山文彦)
鉄 仙	60	02. 9. 14	玉 蟹(鶴澤久)	佐渡狐(山本則俊)		藤 戸(山本順之)	水掛鉈(山本則俊)	
宝 生	61	02. 12. 7	杜若 沢辺之舞(内田芳子)	柑 子(山本東次郎)		経 政(波吉雅之)	鱧包丁(山本東次郎)	
観 世	62	03. 3. 8	通小町(観世恭秀)	口真似(野村与十郎)		小鍛冶(田邊哲久)	魚説法(野村与十郎)	
喜 多	63	03. 6. 7	百 萬(香川靖嗣)	箕 被(山本東次郎)		巻 絹(友枝昭世)	布施無経(山本東次郎)	
鉄 仙	64	03. 9. 6	清 経(鶴澤久)	佐渡狐(野村万作)	解説 法政大学能楽研究所 教授 山中玲子	普及公演(於:高津市民館)		
宝 生	65	03. 12. 6	玉 葛(柏山聡子)	清 水(三宅右矩)	玉ノ段(本間英孝)	鶴 (東川光夫)	雷 (三宅右近)	玉ノ段(本間英孝)
観 世	66	04. 3. 6	敦 盛(田邊哲久)	磁 石(山本則直)		天鼓 弄鼓之舞(観世恭秀)	伊文字(山本泰太郎)	
梅 若	67	04. 6. 12	賀茂 素衝(角当行雄)	素袍落(三宅右近)		千手 郭曲之舞(梅若六郎)	昆布壳(三宅右近)	
喜 多	68	04. 8. 28	東岸居士(友枝昭世)	舟ふな(野村与十郎)		鶴 飼(香川靖嗣)	伯母ヶ酒(野村与十郎)	
宝 生	69	04. 12. 4	藤 戸(今井泰行)	瘦 松(石田幸雄)	講演「能狂言について」(西 哲生)	巻絹 総神楽(小林与志郎)	鬼 瓦(野村万之介)	講演「能狂言について」(西 哲生)
観 世	70	05. 3. 12	井筒 物著(観世恭秀)	因幡堂(山本則直)		舎 利(田邊哲久)	樋の酒(山本則孝)	
梅 若	71	05. 6. 11	藤戸(前:梅若六郎・後:角当直隆)	茶 壺(三宅右近)		雲林院(角当行雄)	入間川(三宅右近)	
鉄 仙	72	05. 9. 10	班 女(鶴澤久)	清 水(山本則孝)		井 筒(浅井文義)	呼 声(山本則直)	
宝 生	73	05. 12. 3	葵 上(寺井良雄)	察 化(山本則秀)	阿 漕(本間英孝)	殺生石(柏山聡子)	鎌 腹(山本則俊)	阿 漕(本間英孝)
観 世	74	06. 3. 4	小袖曾我(岡本房雄・田邊哲久)	蛸 牛(山本泰太郎)		百 萬(観世恭秀)	附 子(山本則孝)	
鉄 仙	75	06. 6. 24	胡蝶 物著(鶴澤久)	魚説法(石田幸雄)		阿 漕(山本順之)	鐘の音(野村万之介)	
喜 多	76	06. 9. 16	養 老(友枝昭世)	舟ふな(野村万蔵)		経 政(香川靖嗣)	仏 師(野村万蔵)	
宝 生	77	06. 12. 2	清 経(田崎隆三)	伯母ヶ酒(山本則直)		八 島(本間英孝)	昆布壳(山本則俊)	
観 世	78	07. 2. 25	高 砂(田邊哲久)	文 蔵(山本泰太郎)		田村 替装束(観世恭秀)	清 水(山本泰太郎)	
梅 若	79	07. 6. 16	羽衣 彩色(角当行雄)	佐渡狐(三宅右近)		舞丸 替之型 (舞丸・梅若六郎・逆髪:角当直隆)	覆音曲(三宅右近)	
喜 多	80	07. 9. 1	六 浦(友枝昭世)	苞山伏(野村万蔵)		弱法師(香川靖嗣)	樋の酒(野村万蔵)	
宝 生	81	07. 12. 1	放下僧(本間英孝)	講演「日本と私の半世紀あまり」(ドナルド・キーン)		葛 城(前田晴啓)	講演「日本と私の半世紀あまり」(ドナルド・キーン)	
観 世	82	08. 3. 1	羽衣 和合之舞(田邊哲久)	鈍太郎(三宅右近)		鶴 (観世恭秀)	墨 塗(三宅近成)	
梅 若	83	08. 6. 14	三輪 二段神楽 彩色(角当行雄)	萩大名(三宅右近)		通小町 雨夜之伝 (梅若六郎・角当直隆)	悪 坊(三宅右近)	
鉄 仙	84	08. 9. 27	能と狂言それぞれの魅力 (三浦裕子・鶴澤久・三宅右近)	数曲一部分(三宅右近)	舞囃子 融 舞返(鶴澤久)	通 盛(野村四郎)	秀句傘(三宅右近)	
宝 生	85	08. 12. 6	巻 絹(大友 順)	講演「日本と私の半世紀あまり」(ドナルド・キーン)		猩 々(本間英孝)	講演「日本と私の半世紀あまり」(ドナルド・キーン)	
観 世	86	09. 3. 15	藤 戸(観世恭秀)	樋の酒(三宅右矩)		海 士(田邊哲久)	膏薬煉(三宅近成)	
喜 多	87	09. 9. 5	阿 漕(友枝昭世)	鬼 瓦(野村万蔵)		夕 顔(香川靖嗣)	文山賊(野村万蔵)	
鉄 仙	88	09. 12. 12	忠 度(鶴澤久)	昆布壳(山本泰太郎)		鶴 白頭(野村四郎)	福の神(山本則俊)	
観 世	89	10. 3. 13	巴 (観世恭秀)	悪 坊(三宅右近)		安達原(田邊哲久)	樋の酒(三宅右近)	
喜 多	90	10. 9. 18	通小町(香川靖嗣)	蟹山伏(野村万蔵)		龍太鼓(友枝昭世)	鐘の音(野村万蔵)	
梅 若	91	10. 12. 11	俊 寛(角当行雄)	福の神(三宅右近)		一角仙人(梅若玄祥)	宗 八(三宅右矩)	
観 世	92	11. 3. 12	隅田川(観世恭秀)	苞山伏(野村万蔵)		土蜘蛛(田邊哲久) シテ代動:寺井崇	柑 子(野村万蔵)	
若 手 喜 多	93	11. 7. 17	半 蔵(友枝雄人)	名取川(山本則直)		融 (狩野了一)	鎌 腹(山本則秀)	
梅 若	94	11. 12. 10	熊野 談次之伝村雨留(角当行雄)	萩大名(三宅右近)		天鼓 弄鼓之楽 (前:角当直隆・後:梅若玄祥)	太刀尊(三宅右矩)	
鉄 仙	95	12. 3. 24	舞丸 替之型 (舞丸:鶴澤久・逆髪:鶴澤光)	舟ふな(三宅右近)	事前講座(3月17日) 講師:表きよし・鶴澤久・鶴澤光	春日龍神(観世鏡之丞)	成上り(三宅近成)	
喜 多	96	12. 9. 1	班 女(香川靖嗣)	鐘の音(野村万蔵)		鶴 飼(友枝昭世)	墨 塗(野村万蔵)	
観 世	97	12. 12. 8	千手 郭曲之舞 (千手:岡本房雄・重衡:田邊哲久)	蚊相撲(三宅右矩)		葛 城 大和舞(観世恭秀)	文 荷(三宅近成)	
鉄 仙	98	13. 3. 20	田村 替装束(鶴澤久)	清 水(深田博治) シテ代動:竹山悠樹	事前講座(3月3日) 講師:三浦裕子・鶴澤久	弱法師 盲目之舞(山本順之)	因幡堂(高野和憲)	
喜 多	99	13. 8. 10	巴 (香川靖嗣)	千 鳥(山本則秀)		黒 塚(友枝昭世)	蚊相撲(山本則孝)	
梅 若	100	13. 12. 14	猩々乱 双之舞 (角当行雄・角当直隆)	二人袴(三宅右近)	舞囃子 高砂(梅若玄祥)	石橋 大獅子(梅若玄祥・角当直隆)	舟渡鉈(三宅右近)	事前講座(12月7日) 講師:角当直隆・松山隆之

川崎能楽堂

Kawasakinougakudo



能
舞
台

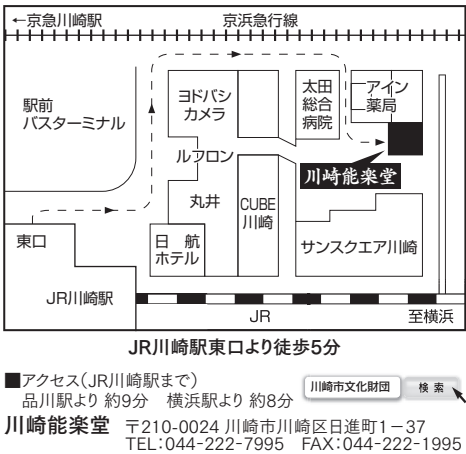


外
観

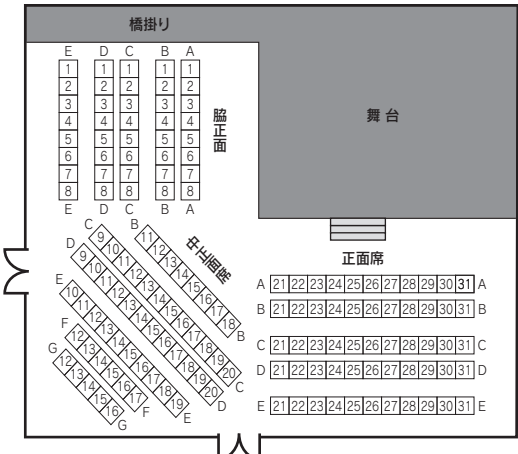


外
観

撮影：小池 汪



川崎能楽堂案内図



川崎能楽堂座席表(148席)



能「翁」観世元昭

撮影：前島写真店

三番三 山本東次郎

川崎能楽堂 舞台披露

〔昭和六十一年六月七日〕

第1部 P 舞台披露 番組													
翁													
三番三 観世元昭													
千歳 山本東次郎													
面箱 竹前治房													
笛 山本則直													
小鼓 藤田次郎													
敷村 鐵雄													
宮増 純三													
大鼓 宮増新一郎													
後見 亀井実													
地謡 竹前嘉房													
藤波 重和													
坂井 音重													
岡 久広													
亀山 雅臣													
沖 宗久													
岡本 房雄													
田邊 竹生													
勝海 登													

川崎市定期能 第100回記念誌

平成 25 年 12 月 14 日発行

編集・発行：公益財団法人 川崎市文化財団

〒210-0007 川崎市川崎区駅前本町 12 番地 1 川崎駅前タワー・リパーク 3 階
電話 044-222-8821